



河原乞食の故郷をバックに激突する愛と死の感動
のドラマ、マスコミを完全に無視した世紀の野心作!

珍説 浦島太郎

膨本 演出
出演

無我利屋 ホン太
歌劇派劇団 無我利屋

78年旧5月5日 久志公民館 8月5日 平田海上ステージ 堂々上演

作者のことば

奄美に住みついで以来、やたらと詩ばかり書いていたのですが……なにしろ多い時には一月3〜4篇をものにしていたのですが、漁里人創刊号、の制作にとりかいる頃から、ぱったり詩作に興味を失い、「結局、今までの何十篇かの詩作は、訓練であつた」ということを悟りました。インド解放の聖者ヴィノバ氏は、若き修行時代に毎日一篇の詩を、火神アグニに捧げたということです。

ところで創作の方は、74年正月、諏訪之瀬島で「バンマン、アシユラマ、の仲間たち」と「ヤマタノオロチ」をパロディ化して、約40名の島民にヤマハホイコットを訴えたのが、私の一作です。この直後島を出て、東京国分寺に「C.C.C太使館」というヤマハホイコット運動の拠点を築いたのですが、「ヤマタノオロチ」は再度ガラリと書き改めて、ロックバンドをバックにつけた前衛的ミュージカルとしてデビューしました。格調の程はともあれ、舞台と観客が完全に一つに溶け合ったという点では正に前衛的田舎芝居でした。

もともとアカデミックな演劇活動など全く経験のない私ですが、そこが又、形にはまらない強味として、「子供の頃、町内会などでやった田舎芝居のムードこそ、人民のための演劇の根本である」という信条のもとに、先ず久志のジイサンやバアサンを楽しませ元気づけるような芝居を、というわけで浦島太郎をパロディにしてみました。

「仲間内、に観せた前衛劇とちがって、未だにテレビドラマを真実放送だと思い込んでるらしいバアサン達にも良く分る芝居で、しかも斗争を鼓舞するようなラディカルなものとなると、パロディが一番手取り早いのです。

助けた竜に連れられて行った竜宮城は、公室に汚染され、悲惨な巢たち。帰ってみれば故郷は変り果て、石油タンクが立並ぶ。決して開けないと約束して乙姫様からもらった玉手箱は、村のボス連中に奪われ、目の前で開かれた箱の中からは、白煙と共に大音響、石油タンクがめらめらと燃え上がるという単純なストーリー。旧5月5日節句の祝いに、久志公民館でデビューしました。本来なら島言葉でやるべきなのですが、ヒヤリングはともかく、スピーキングは未だうくに出来ない私たちに、稽古もろくにしていない状態ではとても無理なので、標準語でやりました。そのため標準語のほとんど分らない何人かのバアサンには、どれだけ通じたか疑問ですが、老人たちの人気者ダマリの浦島太郎と、5才になった万葉の乙姫様の不熱演は、満場、と言っても二十数名ですが、観客と抱腹絶倒させました。次いで枝手久祭には、平田青壮年団の特設海上ステージで、2〜300人の不観衆の前で、堂々たる大成巧をおさめました。私をも含む3名の悪役に対する野次も又、気分の良いものでした。久志公民館と違って今度は決意でやったのですから、石油タンクのハリボテがもっと派手に燃えて欲しかったのですが、「東燃の油は質が悪いぞ」という野次が入りました。それはともかく劇団「無我利座」を名乗ったからには、年一本は新作ドラマを上演せねばと思っています。いずれ名瀬、平田の若者たちとも組んで奄美屈辱史を……

珍説 浦島太郎

第6回 板手久祭前夜祭にて上演 78年8月5日

出演 浦島太郎……タマリ
 乙姫……万葉(5才)
 小亀……ひかり(1才)
 母亀……ポン子
 ガキAと後の村長……ケンジ
 " Bと後の署長……ウルフ
 " Cと後の社長……ポン
 アバス(針4本)……ミオ(妊娠9ヶ月)
 タコ……宇摩(2才)
 タイ……ナミ
 貝……セツ子
 ヒラメ……エミリー
 奇形魚……エー子

音楽 トシ
 照明 忠晴、ノゾミ、パーラ、アユミ
 セット 中野君、石田君
 テープ ヤツチャン

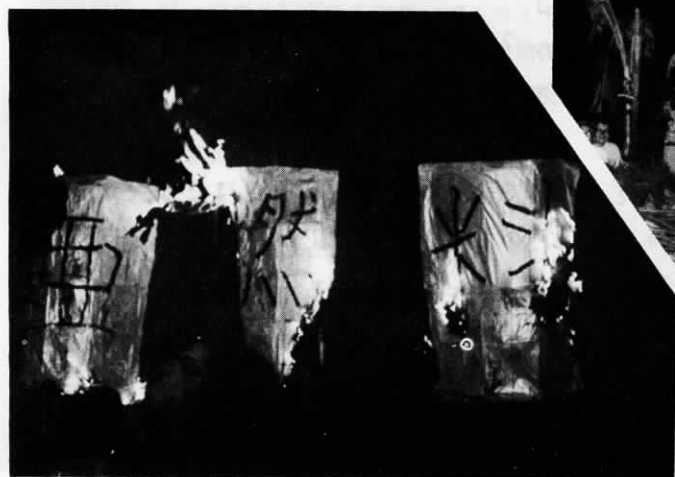
オ一場 漁村の浜辺
 オニ場 竜宮城
 オ三場 石油タンクの立並ぶ元の漁村



オ一場



オニ場



オ三場

オー場 漁村の浜辺

3人の男の子が、棒切れで子亀をいじめている

浦島太郎 登場 ガキ共を見つけて

太郎 「アゲー クレクレ」 (アゲーは感嘆詞、これこれ)

「そんな小さな亀をセイバツすんな!」 (征服、いじめるな)

子A 「だって メデラシヤヤー」 (珍らしや)

B 「ウジも スランナー」 (オジさんも やらないか)

C 「ワジワジと殺そうよ」

太郎 「アゲー ヒドイことを言うな もうやめろ!」

子A 「やめたら何くれる?」

B 「ウジャ カネ持っとるかい?」

C 「ウジ 今日メシ食ったか?」

太郎 「アゲー この野茶坊め! いい加減にしろ」

子A 「へん、実力阻止かい?」

B 「ワキャニヤ ウヤカタがついとるぞ!」
(オレには親方が……)

C 「ウジ、貧乏人のくせに、おつ込んどった
おが、エエンチャうか?」

太郎 「アゲー、このバカーツ!!」

太郎、踏み出して子亀を抱き上げる。

その時、悲鳴と共に母亀登場

母亀 「大変、タイヘン、私の可愛い赤ちゃんが、
……何処へ行ったの、ひかちゃん、ひかち
やーん。アラ、こんなところにいたの!!」

太郎 「アゲー あなたが子亀のお母さんですか?」

母亀 「はい、何処のどなたか存じませんが、本当にありがとうございます」

母亀、太郎より子亀を受取る

太郎 「アゲー ワンナこのシマの漁師で、浦島太郎という者です。たまたま此処を通り
かいると、この三人の野茶坊共が、あなたの赤ちゃんをいじめていたのです。(ガ
キ共に向って)クレツ、アガンイキー!! (こらっ あっちへ行け)

3人のガキ、アカンベーをして 歌いながら立去る

コーラス

イーカレ イカレ 何見てはねる

竜宮乙姫さん 見てはああねる ♪



久米公民館に於けるオー場

母亀 「浦島様 どうぞ竜宮城へ遊びに来て下さい。あなたのように心優しくて、少々イカれた方を私達は探していたのです。竜宮城の乙姫様も、あなたをお連れしたら、きっとお喜びのことと存じますわ」

太郎 「アゲー 竜宮の乙姫さま……？」

母亀 「ガーシ キュラムンナ」 (そう美人よ)

太郎 「アゲー オレ行ってみよ！」

母亀 「アゲー それは それは、では私が御案内しましょう」

太郎 母亀の後に従って、退場

バックコーラス

♪ 通リやんせ 通リやんせ

竜宮城の細道じゃ

御用のない者 通しやせん

行きは良い良い 帰りはこわい

此処はどここの細道じゃ

どおそ通してくりやさんせ

太郎のイカれたお祝いに 公害見せに参ります

こわいながらも通リやんせ 通リやんせ ♪

第二場 竜宮城



久志公民館にて
石、石よりひかり、ポンチダマリ
左右より葉ミイ宇摩



乙姫と亀たちの居並ぶ前へ 母亀と太郎登場

太郎 「アゲー まるで夢のようじゃ」

乙姫と亀たち 「イモリンシヨーレ」 (いらっしやいませ)

太郎 (びっくりして) 「アゲー 天国じゃ 極楽じゃ」

乙姫 「私が竜宮の乙姫です、どうぞよろしく」

太郎 「アゲー 女じゃ！」

乙姫 「どうぞ お座り下さい、さあお楽にどうぞ」

太郎 着席、亀たち酒肴を運ぶ

乙姫 (酒を注いで) 「ミシヨリンシヨーレ」 (召上りなされ)

太郎 「アゲー 酒じゃ！」

興に乗って乙姫、次いで亀たち、立上って踊る

コーラス

♪ 昔むかし 浦島は 助けた亀に連れられて
竜宮城に来てみれば 絵にも描けない美しさ

乙姫様のゴチソウに タイヤヒラメの舞い踊り
たゞめずらしく面白く 月日のたつのも夢のよう ♪

乙姫 「さあ どんどん召上がれ」

太郎 「アゲー これはうまい……しかしちょっと臭いな？」

タイ 「アラ お気づきですか、実は……」

コーラス

♪ 竜宮城の臭さん このごのちよっと変よ どーしたのかなー？ ♪

太郎 「アゲー どうかしたのですか？」

コーラス ♪ サシミにしようと さそつても

煮つけにしようと さそつても

答はいつも同じ クーサーイ ♪

アバス 「油臭いのでございます、私たちの体に油がしみ込んで、生きながら腐れているのでございます」

母亀 「それだけではございません。竜宮城の屋根も庭も、スラツジでドロドロです」

タイ 「そのため私たちの仲間は、最近、背骨が曲ったり、尻尾がはかたり、頭が狂ったり、次々と恐ろしい不幸に見舞われております」

奇形臭や、狂った臭、登場

太郎 「アゲー 毒じゃ！」

アバス 「それもこれも、人間の垂れ流す石皿のせいです」

母亀 「お陰様で、十億年の伝統を誇る竜宮城も、今や絶滅寸前です」

太郎 「アゲー 恥じゃ 人間の恥じゃ、一体私はどうしたら良いのですか？」

乙姫 「歌を 歌って下さい」

太郎 歌う。乙姫、次いで臭たち、立上って踊る

太郎 ♪ 昔むかし浦島は 助けた亀に連れられて
竜宮城へ来てみれば

絵にも描けない オゾマシサ ♪

乙姫、臭たちのコーラスに、太郎立上って踊る

♪ 竜宮城のスラツジや タイヤヒラメの毒の味
たゞ恐ろしく やるせなく

月日のたつのも 腹が立つ ♪



平田海上ステージ

竜宮城

右より

エー子

宇摩

ナミ

オ葉

ヒカリ

ホン子

セツ子

エミリー

太郎 フラフラと踊り終って

太郎 「アゲー 毒のせいかないふ悪酔いしたようじゃ、そろそろ家に帰らんば」

乙姫 「もう お帰りですか。では、おみやげに玉手箱をどうぞ」

太郎 「アゲー 何が入っているのですか？」

乙姫 「それは内緒です」

タイ、玉手箱を運びながら

タイ 「どうか、どんなに困っても、この箱は明けないで下さい」

全員 「ドーカ 箱は開けないで下さい」

太郎 「ガシ ガシ みんながそんなに頼むなら、箱は決して開けません、竜宮城の思い出に、永久保存にいたしましょう、ではみなさん ごきげんよう サヨウナラ」

全員 「アトラヤー」 (又ね、さようなら)

太郎 コーラスに送られて去る

コーラス ♪ ガンバロウ 人間の世界に

海の内外の ウラミがある

呪いを呼ぶ ウラミがある

戦いは此処から 戦いは今から ♪

オ三場 元の決別 たゞし銀色の石油タンクが立並ぶ

太郎 「アゲー やっと帰った懐しいシマ……アゲー あの銀色の怪し気な建物は何じゃ、ほんの2、3日 留守にしたはずなのに 何という変り様だ」

和人3人登場

太郎 「クレクレ アゲー 見なれん顔じゃのう？ ウラヤ何処のシマン4ユウかい？」

村人A 「ワンナ クヌシマヌ 村長じゃ」(私はこのシマの)
 〃 B 「ワンナ クヌシマヌ 署長じゃ」
 〃 C 「ワンナ クヌシマヌ 社長じゃ」
 太郎 「アゲー ウラヤ フマ浦島太郎 知らんね？」(君たちこの…)
 村長 「浦島太郎？ 全然知らん」
 署長 「聞いたことも ねんどー」
 社長 「オーその時代遅れの格好は何じゃい。まるで漁師みたいではないか？」
 太郎 「アゲー ワンナ フントヌ漁師ど！」
 村長 「ハゲー 漁師？」
 署長 「石油基地が出来てから この島に漁師はおらんぞ」
 社長 「自然(死産)では食えない。ということが証明されたのじゃ」
 太郎 「アゲー 石油基地って何だ？」
 村長 「クワ マガンタメノ南発じゃ」(子や孫のための)
 署長 「侵略のための軍備拡張じゃ」
 社長 「金もうけのための文明じゃ」
 太郎 「アゲー さては竜宮城を破壊するのは オマエ達だな？」
 村長 「石油に公害はない」
 署長 「自然破壊などおぬかお奴は 逮捕するぞ！」
 社長 「竜宮城はど 金さへあれば なんぼでも作れる」
 太郎 「アゲー 命と自然は 金に代えられん」
 村長 「時は金なり 金は力なり」
 署長 「ム所の沙汰も金次第」
 社長 「南発で築く 豊かな宇検村」



オ三場

石より

ダマリ

ケンジ

ウルフ

ポン

照明係

徳山忠清氏

太郎 「アゲー」と言って脈まずいて 手を合やす
 「天ちゃんにまします 我らのドクよ
 汝の御名のドクされんことを
 御国のドクされんことを
 汝のドクが 天にてなまごつく 地にもならんことを
 我らが日毎のドクを 今日ドクしたまえ
 我らにドクする者を 我らもドクづくごとく
 我らのドクをも ドクしたまえ
 我らを試みに合寄せた以上 ドクによって汝 滅びたまえ」

村長 「オイ その箱は何だ？」

署長 「何処から盗んで来た？」

社長 「いくらで売るか？」

太郎 「これは玉手箱という 我が家の家宝じゃ！」

村長 「家が無いのに家宝とは これいかに？」

署長 「怪しい 過数犯だな？」

社長 「金で言うことをきかない奴は 我々の敵だ！ ヤレーツ!!」

乱斗の末、太郎気絶、3人箱を囲んで

村長 「竜宮城のみやげか？」

署長 「ヘドロでも入っているのか？」

社長 「空の空 空っぽでもともと」

3人 「では イチ ニノ サン!!」

箱を開けたとたん 白煙、轟音、石油タンク炎上

3人 のた打ち回って倒れ 肉絶 舞台暗転

音楽につれて 乙姫 魚たちの亡霊登場 浦島太郎を助け起こして舞い踊る

(おわり)



音楽担当のトシは、'75年琉球弧モヤラ
 バンのメンバーの一人、東京在住。

